

【研究ノート】

私立 H 高校の英語教育改革実践

— 訳読法から英語でコミュニケーションな授業への転換、中間報告—

立命館大学 湯川 笑子

はじめに

文部科学省は 2009 年告示 2013 年より施行の高等学校学習指導要領以降、2018 年告示 2022 年施行の新指導要領の中でも、「授業は英語で行うことを基本とする」と謳った（文部科学省, 2017, p.240）。この方針が実現すべきものと全国に周知された。さらに、そのように実施されているかどうかといった調査も中学高校ともに毎年行われている。ただ、この実行に対しては、特に強制力もペナルティもなく、こうした授業のための教員研修も限定的なので、実行されていない学校はまだ多く残っている。筆者の大学からは 40 名程度の学生が毎年英語科の教員の卵として教育実習に行くが、「現場の英語教育は、大学での指導法科目を通じて実現するようにと習った、英語で教えるコミュニケーションな授業だった」と言って帰ってくる学生は、残念ながら、まだ半分にも満たない。

こうした現状は、筆者が 2018 年度月に一回のペースで学校を訪問し英語改革のために研修を提供してきた私立 H 高等学校でも同じであった。非常勤講師を含めて 12 人の英語教員スタッフの多くが長らく日本語を使って、文法訳読法で授業をしていたらしい。2017 年度に研修の先行実施の形で、未来教育研究所の高見佐知氏が 2 人の若手教員に対して指導を始めていた。2 人の教員は、筆者がビデオ講義として講じた教授法についての解説に基づいて英語での授業法をこの年度から試していたが、全スタッフに対しての研修を開始したのは、2018 年の 4 月からであった。

H 高校の英語教育改革は、これを執筆している 2019 年 3 月時点で、「コミュニケーション英語」の科目については、全員英語でコミュニケーションに教えるやり方に移行したという意味で、半分ほどを成し遂げたと感じている。ただ、その細かいノウハウには改良の余地があり、高校英語のもう一つの科目である「英語表現」の改善には着手できていないと言う意味で、改革は登山に例えればまだ 5 合目に達したに過ぎない。本報告は、この 1 年間の英語教育改革を振り返って、改革前の問題の正体の分析、それを解決するための対処法として行った研修の中身の要約、その成果と成果をあげるための研修の必須要素の特定を試みたものである。今の日本には、この H 高校と似たような状況にある学校はまだ多い。この報告がそうした学校の改革への端緒となれば幸いである。

問題の正体

英語は他の学校教育の教科の中でも、門外漢からの講釈が入ることが非常に多い。第二言語習得や教授法の効果など、1970 年代から応用言語学という学問分野で研究され検証済みの事実を何も知らない人から実にいろいろな意見が寄せられる。それだけ英語教育は人々の関心が高いのだとも言えるが、歴史的に母語以外のことばを学んで運用しないと生きていくことができなかった、ヨーロッパの小国をはじめ多くの多言語国家の国民に比して、日本に住む人々は母語以外の言語をコミュニケーションの用に供するまで学んだ歴史・人が少ないからだとも言えよう。

英語教育が、文法を知識として教え、テキストを日本語への翻訳を通して知るという、いわゆる文法訳読法から脱皮できない理由を3つの段階にまとめてみた。まず、【第1ステージ】①上記のような状況にいるために、目標言語のインプット、アウトプットの多い、しかも適宜言語フォームに焦点化して、英語で何ができるようになるかを見据えながら教える英語教育の必要性について認知できていないという問題がある。(語学教師が言語習得のために整備できる要件については Lordes, 2009, Chapter 4 を参照されたい。)英語で行うコミュニケーションな授業を身近に見たこともなく、たまに見ても、それは自分の学校や自分の生徒には不可能な別世界のことだと切り捨てる。つまり、上記の要素がどのような生徒にとっても第二言語習得のために不可欠だという、「正しい英語教育理論の認知の欠如」の問題である。

その認知が講義等を通して得られた(そして納得した)次の段階で問題になってくるのは、【第2ステージ】②やりたいのはやまやまでも、どうやればいいのかわからないという、教授法についての知識の欠如の問題である。教科書の本文を日本語に訳さないなら、いったいどうやって生徒に理解させればいいのかわからない、参観した授業では、パワーポイントのスライドやデジタル教科書の画面が出てくるけれど、あれをいつ、どのように使うことがどういう効果をもたらしているのかなど、詳しいことが分からないので実践しようがないという問題である(「教授法についての知識の欠如の問題」)。

こうした疑問に答えるべく、こちらから一つの単元の単元計画や、50分の授業の活動の種類と時間配分についての説明をする。授業で使う教材をワークショップ式に教え、作る練習時間も提供する。それを聞き、やり方を納得した後に、最後の問題として浮かび上がってくるのが、③【第3ステージ】理想の教授法で教えるために必要な教師の「英語力不足とトレーニング(慣れ)不足」の問題である。

この1年間H高校では、こうした3つの問題を解決すべくこの順に研修を行っていった。どのようなことをしていったのかを次の節で語っていききたい。

第1ステージの教員研修の中身

当然のことながら、上記の①②③の研修内容は、筆者が大学の英語教員養成のための指導法科目内で教える内容と同じである。①は講義で、②③は内容や技能の獲得のレベルに応じて講義の中や少人数の演習の中で行うが、①の問題は、自分の中学校高等学校時代に古い教授法に飽き飽きし、それを変えたくて免許課程を履修している者も多いことから、むしろ大学生の方が現職教員よりも納得するのが早い。

現職教員に、慣れ親しんだ文法訳読法(中学校の場合にはパターンドリルを多用するオーディオ・リンガル法もよく見られる)の功罪を知らしめるには、理論書に書いてある事実を講じるだけでなく、事例を紹介した。英語学習環境が優れているとは言えない公立学校で展開されているコミュニケーションな授業録画を見せる、筆者が支援した結果中学校3年生の英検3級合格相応の力を持つ生徒が4年間で20%未満から50%台へと2.5倍になった自治体の事例を紹介する、私学で条件を整えば、コミュニケーションに教えることでここまで伸びるというエピソードや英語力がよく表れている映像を見せるといった方法をとった。百聞は一見に如かずで、事実を提示することで、改革をすればまぎれもなく見違えるように生徒に力がつくのだと、それができていないのは、英語教育のプロとしての教師の力不足以外の何物でもないのだということを伝えた。

第2ステージの教員研修の中身

②の教授法に関しては、まず、外国語科という教科の中の中心的な役割をなす「コミュニケーション英語」という科目をとりあげ、この科目の指導の仕方のひな型を作成して提示した。「コミュニケーション英語」の教科書はさまざまなテーマを扱った読みものを、パート1～4という風に区切って提示していることがほとんどである。その後には、文法事項の復習や、そのテーマに沿った発表、作文、やりとりなどの発信練習を配置するが、まずは、そのパート1～4（単元によっては6など多い場合もある）を扱う各50分の授業を次のように組み立てるように指示した。

「帯活動（単元を通してあるいは学期を通して積み上げるドリル活動や読解・発信などの意味ベースの活動10分程度）⇒新出単語の指導（㊤単語プリント使用）⇒本文読解の指導 T/F Q, Wh-Q（㊤読解・語法プリント使用）⇒音読と細かい文法・語法の確認（㊤音読プリント使用）⇒プチ表現活動」

もちろん、こうした組み立ては教材の難易度、生徒の英語力、教員の英語力など様々な要因によって調整すべきものであり、まったく異なる教え方も可能である。力のある生徒の場合には、単語に親しむ部分は完全に宿題にすることもあろうし、読解もある程度生徒に任せた上でいきなりその内容の再話や討論から授業を始めるといったやり方もあり得るが、H高校の授業改革では、生徒の英語力や、教員が英語で指導することにまだ慣れていないことも考慮して、まずは、このような推奨手順を進めれば日本語を多用しなくても生徒の読解力、語彙・語法の理解、聴解力、発信する力がつくことを体験的に理解してもらった。輪番で担当する月例の校内公開授業を通して、単元は異なるが同じやり方で進める授業を全員で見ることで、細かい調整のやり方も学んでもらった。

㊤単語プリント、㊤読解・語法プリント、㊤音読プリントは、「生徒に配るハンドアウトの3点セット」とであると命名し、単元の始まる前に単元計画に基づいて準備をするように促した。㊤単語プリントには、単語、品詞、日本語の意味と、その単語を使用した例文もしくは英語での定義を一行に並べることで、授業中に練習しやすくするようにと指示した。㊤読解・語法プリントは、テキスト読解のかなめとなる英語での読解チェック設問と、本文に出てくる新出文法事項の解説および練習問題からなる。

T/F-questions は、与えられた文が本文の内容と合致しているかどうかを問う問題であり、テキストの内容の重要なポイントをすべて網羅するように作成することが重要なので、夏季集中の研修や通常の研修時に多くの時間を割いて、よい設問の作り方を教えた。テキストのメッセージ内容をすべてきちんと網羅しているかどうか、焦点化しなくてもよい些末な部分を設問としていないか、設問の文章の意味が分からなくても教科書の文との対照でわかってしまう「視力検査」問題や本文を読まなくても一般常識でわかってしまうものになっていないか、問題文が本文よりもさらに難解で長い文章になっていないか、問題文に英語のエラーがないかどうかなど、チェック項目は多い。それに対して、Wh-questions は、文法や語法上難しい文章の読解に焦点を当てたり、言外の意味や生徒のコメントを引き出す質問である。作るには聞きたいことをそのままストレートに質問として聞けばいいので、T/F-questions を作るよりは（教師の作問力に関する）難易度が低い。

本文テキストの意味が分かった後で、㊤音読プリントを使用して音読や、再話などの練習を生徒にさせる。その音読プリントは、本文のコピー、対訳の日本語、本文の語や句をところどころ伏字にしたバージョンの本文コピーという風に3列にし、本文を伏字なくコピーしてあるテキストには、必要に応

じて、英文の該当箇所の下線を施して既習であっても注意を促したいイディオムや文法事項に関する注を小さい文字サイズで付記しておくようにルール化した。こうすることで音読練習のたびに、要注意事項に目がいき、学習効果が高いからである。

New Words List in Lesson 6 "Space Elevator" [Section 1]			
No.	New Words	Japanese	Meanings / Example Sentences
1	difficulties	(名) 困難	彼の事は困難に見つかった。 I had no difficulties (n) finding his house
2	debris	(名) 破片	宇宙ゴミは周囲の課題の一つだ。 Collecting space debris is one of the pro
3	benefit(s)	(名) 利益, 恩恵	彼は誰し人のために全ての金を費やした。 He spent all his money for the benefit
4	access	(名) 接近方法	13参照1
5	gravity	(名) 重力	無重力状態で宇宙遊泳できる。 We can walk in space in zero gravity. en
6	industry	(名) 産業, 工業	ホテル, 銀行, コンビニはサービス業に含まれる。 Hotels, banks and convenience stores are service industries
7	cargo	(名) 積荷, 貨物	貨物列車が通り過ぎていく。 Cargo trains are passing by me.
8	explore	(動) 探査する	「はやぶさ」は小惑星を探る無人探査機だ。 Hayabusa is a space probe exploring as
9	outer	(形) 外側の	宇宙ゴミは毎日宇宙空間を漂っている。 Space debris is drifting in outer space
10	generation	(名) 世代	世代間格差が問題をさらに難しくさせている。 Generation gap makes the problem more diffi
11	work on	(動) へに取り組み	できるだけ早く計画に取り組みなさい。 Work on the project as soon as possible.
12	more and more	(熟語) ますます	ますます多くの外国人が日本を訪れている。 More and more foreign people are visiting Je
13	have access to	(熟語) 利用できる	学生はこのコンピュータが1日中利用できる。 Students have access to these computers all

図1 西崎善久先生作 ㉒ 単語プリント例

Lesson 6 A a space elevator (pp. 77-87)		Section 1 Reading Worksheet (音読プリント)	
p. 78			
1	Humans have used rockets / ★現在完了形(継続)「～し続けている」	人間はロケットを使い続けています。	Humans have (u) rockets /
2	to go into space. //	宇宙に行くのに	to go into (s) . //
3	I hear. //	私は聞いています。	I hear. //
4	there are some problems with them. // ★「関連」	ロケットには問題がいくつかあると	there are some problems (w) them. //
5	I think. //	私は考えます。	I think. //
6	rockets have three major problems. //	ロケットには主に3つの問題があると	rockets have three (m) problems. //
7	The first is the possibility. //	最初の問題は可能性です。	The first is the (p) . //
8	of an accident. //	事故の	of an accident. //
9	Rocket fuel is very powerful and dangerous. //	ロケットの燃料は非常に強力で、危険です。	Rocket (f) is very (p) and dangerous. //
10	The second is the cost. //	2つ目は費用です。	The second is the (c) . //
11	Rockets need a huge amount of expensive fuel. //	ロケットは大量の高価な燃料を必要とします。	Rockets need a (h) (a) of expensive fuel.
12	The third is the need to train passengers / ★不定詞(形容詞的用法)	3つ目は乗客を訓練する必要があるということです。	The third is the need (t) train (p) . //

図2 西崎善久先生作 ㉓ 音読プリント例

この他に教師が用意すべきことは、授業中に使うパワーポイントスライド、単元が終わった後の発信活動の考案と実践がある。パワーポイントスライド作成については、基本的に教員間のサンプルを見て学びあいながら、自分が使い勝手の良いものを作成し、公開授業のたびに、事前事後に改善のためのコメントを私から加えることで習熟してもらった。単元が終わった後の発信活動の考案と実践は、「英語表現」の科目にもつながる、新たな教授法分野の領域なので、別途研修が必要である。2018年度には、終盤の数か月でやっと着手できた程度なので、次の年度への継続課題となった。

第3ステージの教員研修の前身

第3ステージに達すると、おのずと、理想の教授法で教えるために必要な教師の「英語力不足とトレーニング(慣れ)不足」の問題が教員スタッフの目にも、教員研修の最中にも浮かび上がってくる。強化しなければならない課題の一つは、すでに第2ステージで作成した読解のための T/F-questions を作るのに必要な国語力と英語力がある。これについては、パラグラフごとのメッセージを読むと国語力の鍛錬、よい設問を作るための教育的な発想と正確な文を作るという両面での英語作文力の訓練を、実際に教材に照らして演習をし、筆者からコメントを加える地道な作業を繰り返すしかない。

次に大きな壁となるのが、本文の導入、読解のための問題を生徒に取り組みさせた後に、答え合わせを英語で行う時のスピーキング力である。これについては、冬休みの2日間の集中研修の時に、徹底して実施した。比較的やさしい内容の単元と中身が濃い単元を4つ取り混ぜて選び、その内容を指し占める写真を4枚程度与えて、1単元につき3分以内(中身が濃い単元は4分)にもれなく情報を伝える要約プレゼンができるように練習してもらった。このような単元全部をモノログで生徒に説明するという場面は実際にはないが、流暢に、おおむね正確な英語で、単元のどこの部分についてもやさしい英語にパラフレーズする力があれば、授業内のどんな局面にも応用が利くので、総合的に、単元内のどの話題、部分についても英語で語れるようになるための訓練である。互いにスマートフォンでパフォーマンス

スを録画しながら、修正しあうという各自の練習のあと、全員の前で、一人ずつそのプレゼンを行い、筆者と同席したベテランのネイティブスピーカーが、一人一人のプレゼン内容や話した英語に関して助言をした。そのあとで、そのネイティブスピーカーの模範を聞いて、授業内の語りのうまさの精密度を上げる必要性を心に刻んでもらった。(英語力が非常に低い小学生を対象にした語り方、**teacher talk** についての論考に、湯川 (2017)、三ツ木, (2018) がある。)

翌日は、その同じ単元について、筆者があらかじめ T/F-questions として作っておいた設問の「答え合わせ」練習を行った。F が答えである場合、なぜ本文内容と異なるのかの説明を英語でうまく行う練習をするために、あえて設問は答えがすべて F になるように作っておいた。上記の内容説明も同様ののだが、英語で英語力の不十分な生徒にわからせるための語り方は英語教師独特のストラテジーを要するもので、単に語彙や語法の豊富さだけではない。しかしすべての技術の必要条件は、高校生の教材として出現する程度の英語内容について流暢に正確に何通りにも説明できる英語力なので、これの訓練なしには何も始まらないことを全員に納得してもらい、2 日間集中的に訓練した。

2018 年度の教員研修の成果

このような研修を経て生まれた成果はいろいろある。まず、①12 人全員が文法訳読法をやめ、研修で紹介したフォーマットにそって英語で英語授業をするスタイルに移行した。この実践促進と確認のために全員が公開授業を少なくとも 1 度は経験した。まだまだ改善の余地はあるものの、一定の成果である。公開授業を経た後で、新しいスタイルでの授業の中のルーティーンが生徒に理解されてきて、歯車が回りだした感があったのか、公開授業を経験した教師の中から「ルーティーンって大事ですね」「慣れて大事ですね」といった発言も聞かれた。実際、教師の話す英語がやや不十分でも活動のルーティーンに助けられて、生徒が求められる作業にすぐに移行する場面も見られるようになり、そうすれば、活動自体には多くのインプットとアウトプットを確保できるように組み立てられているので、自然に英語が身についていくというサイクルが見られた。

研修を重ねていくうちに、②一つ一つの活動の意義を教師が精査するということを改めて知ったのではないかと想像する。今までは教科書に載っている設問や教科書会社が売っている教科書準拠のワークブックなどを無批判に順番にやるが多かった。ところが、上記のハンドアウトの 3 点セットを作るのに、そうした問題の多くが役にたたず、育てたい力が曖昧なエクササイズが多いことに教師は気づかされた。たとえば、読解や音読のあと、本文を再話したり要約したりするのは非常によい練習だが、教科書の単元の終わりに、すでに要約文が書いてあってところどころが伏字になっており、それを適切な文字で埋めるといった「要約」と銘打った設問は、実際のところ要約力を育てる問題ではない。これを埋めることは、この要約文を読解する力と語彙力を要するだけの、負荷の低い、初期段階でするプラクティスであって、本文テキストを実際に生徒が要約する力を育むようにデザインされていない。難易度が単元内の学習のステージに合わないとか、学習効果の少ない問題は取捨選択して、どんな力をつけるためにどのような活動をさせるべきなのかを吟味する癖が以前よりはついたのでないだろうか。

そうした発想を延長して、③H 高校の英語関連のカリキュラムや担当者、クラス人数、使用教科書など、学校としての指導体制を、次年度にむけて見直す作業に着手し、2019 年度からは改善できるところから改善する運びになった。

どこの自治体や学校から教育改革を依頼されても、最初訪問した時の筆者のショックはいつも大きいものがある。あれだけ文部科学省が言っているのにと絶句しつつ、変えなければならないことが多すぎることに打ちのめされた気分になる。そうした中、2018年度の12カ月にわたる研修で上記の成果が上げられたキーとなった要因は3つあったように思う。まず一つは、自校の経営にかけて不退転の覚悟をもって改革を決め、その姿勢を常に筆者と共有した学校の管理職と、それを受け止めて真摯に取り組んだ教師集団の姿勢である。自分にできるかどうかという不安は誰しもあるが、やらねばという姿勢が全員にあり、時がたつにつれてそれがゆるぎない確信になっていったことが成功の土台にあった。

2つめに、研修を「コミュニケーション英語」に絞って、まずは誰にでも取り組めるひな型とそれを実行するノウハウを具体的に示したことがあげられる。ひな型を示しながら、ノウハウをワークショップで教えながら、できないことが分かるたびに、そこにまた焦点化したトレーニングをすることで、この型にのっとった授業をやらない（やれない）理由がなくなった。

3つめには、どの人にも公開授業を課したことである。筆者と一緒に改革指導にあたった未来教育研究所の高見氏のサポートを得つつ、何とかスタッフ全員に、同僚と筆者らに見てもらったという充実感は、その後の授業改善に継続的に取り組むエネルギーと自己効力感を生む。これが一巡したあとに迎える次年度には、加速度のついた改革に移行できるのではないかと筆者は期待している。

引用文献

Lordes, O. (2009) *Understanding second language acquisition*. London: Hodder Education.

三ツ木由佳 (2018) 「第10章ティーチャートーク」原清治・春日井敏之・篠原正典・森真樹 (監修) 湯川笑子 (編著) 『初等外国語教育』

文部科学省 (2017) 『高等学校学習指導要領』「第8節外国語」

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf よりダウンロード

湯川笑子 (2017) 「英語授業における英語使用と日本語使用—いつ、何のために、どのように使うのか—」『日本児童英語教育学会 (JASTEC)・研究紀要』第36号 pp.149-164

A Preliminary Consideration of Special Activities and Classroom Management for Learner-centered Classroom Building: Focusing on “Peer” Activities Improving the Quality of Horizontal and Diagonal Relationships

Emiko Yukawa

This paper reports the practice and its effects of in-service teacher training that the author has been involved in since April 2018. The aim is to reform the English education at H Private Senior High School. At the point of March 2019, in which this report is under preparation, this project is still far from completion. Thus, this should be taken as an interim report.

It has long been held that English should be taught basically in English aiming to develop communicative abilities. Nevertheless, a large number of schools still adopt the grammar-translation method, and H School was no exception. I surmise that this situation has persisted for the following reasons, which became apparent during three training stages: [the 1st stage] A lack of recognition of the necessity for English teaching to provide rich target language input, output, and occasional and timely focus on forms, in order to increase what learners can do in the target language; [the 2nd stage] A lack of knowledge about pedagogy for such language teaching; [the 3rd stage] The inadequacy of teachers' English proficiency and a lack of actual experiences in implementing such pedagogical practices.

At H School, these problems were progressively presented to the attendees and then addressed through lectures, showing examples, presenting a model lesson framework, giving training for implementing recommended lessons using this framework, and requiring monthly open-class lessons for all the faculty to observe and discuss afterwards. As a result, all 12 English teachers learned to conduct communicative language teaching in English, making use of the steps given by the author. This paper discusses the details of this teacher education and its effects.